

恋の絶頂セッション、ブチ鳴らせッ！

― 僕らの情欲演奏記 ―

夜果堂書房／高瀬ザクロ

第一話

夜行バスのドアが開いた瞬間、冷たい小樽の潮風ではなく、むっとする東京の朝の熱気が肌にまとわりついた。

「……わーっ、ほんとに来ちゃった……東京」

光原いちは両手を広げ、都会の匂いを胸いっぱい吸い込んだ。

その声に振り向く男たちの視線が、一瞬で彼女の身体に吸い寄せられる。北国育ちらしい透き通る色白肌は、朝の光をやわらかく反射してほのかに輝いている。耳の下で揺れる水色のボブカットが風にふわりと踊るたび、首筋の白さが露わになる。

一見すると、守ってやりたくなるほど華奢な体つき――

だが、薄手シャツ越しでもわかる、形の整った豊かな胸の膨らみが男たちの視線をさらって離さない。胸元の布地が歩くたびに小さく上下し、そのたび男の想像を勝手に膨らませる。

本人はそんな効果をこれっぽっちも意識していない。

無防備に笑うたび柔らかかそうな唇が陽の光に濡れて光り、無自覚に男を煽る“魔性”の気配を漂わせていた。

歌えば、ハイトーンで甘く透き通る声が空気を震わせる。

吐息の混ざったその声は、まるで耳元で囁かれているように甘く、

聞く者の胸の奥――いや、それ以上の場所まで熱くさせる。

彼女が歌うのは、恋心をくすぐるような甘いポップロック。

地元小樽でその声に恋してしまった男は一人や二人ではなかった。中には歌声だけで夜を越えた者もいた。

そんな彼女と、ギターの東谷宗介、ドラムの堂本倫太郎で組んだ三人組バンドは地元のライブハウスで確実に人気を伸ばしていた。客はいつも満員。物販のもすぐ売り切れ。

地元ではちょっとした有名バンドだった。

そんなある日、東京の小さな音楽事務所から声がかかった。

「東京でデビューを目指してみないか？」

いちかの声にギターケースを背負う東谷宗介がしかめっ面をする。

「……駅前で叫ぶな、田舎者丸出し」

「だってテンション上がるんだもん！」

後ろで大きなスーツケースを引く堂本倫太郎が笑った。

「まあまあ宗介、いいじゃん。いちかはこういう方が似合うって」

スカウトされたとはいえ、弱小事務所。

用意された部屋はリビングひとつ、個室ひとつの安アパート。

男二人と女一人の同居生活が、こうして始まった――。

第二話

「部屋割りは…個室はいちか、おれらはリビングで雑魚寝だな」
倫太郎が言う。

「え、私だけ個室？　なんか悪いなあ」

「女一人を男と同じ部屋で寝かせるかよ」

宗介がぶつきらぼうに言う。

倫太郎は笑って頷いたが、二人とも心の奥ではまったく別の理由で個室を譲っていた。

宗介は、あの夜の記憶を思い出していた。

小樽での最後の夜、スタジオ帰りに二人きりになった帰り道。

別れ際「最後だから…」と、いちは俺の袖をくいと引き、自分の部屋へ招き入れた。

唇が触れた瞬間、抑えていたものが一気に溢れ出す。

キスを重ね、服を剥ぎ合い、熱を帯びた肌同士が重なる。

ベッドに腰を下ろした俺の耳元で、囁くように――

「…私が上、いい？」

そう言って彼女は、自分からゆっくり跨がってきた。

背筋をすつと伸ばし、先端を割れ目にぴたりと合わせる。

「んっ……ふぁ……♡」

熱い入り口が押し広げられ、とろりと蜜が溢れる。

ずぷっ…ずちゅっ…んあ…

ゆっくりと奥へ沈み込み、宗介の極太が膣奥まで届いた瞬間、
いちかの腰が小さく震えた。

中はぎゅうつと吸い付くように締まり、まるで柔らかい肉が俺を
逃がすまいと絡みつく。

「はあっ…♡ 宗介のおっきいの…ぜんぶ…入ってる…♡」
甘い吐息をこぼしながら、腰をくねらせる。

前後に擦り上げ、根元まで押し込むたび、Ｔシャツ越しに見ていた
胸が今はむきだしで大きく揺れ、先端が俺の胸にぴたりと当たる。
ずぷっ…ぬちゅっ…ぐちゅっ…

卑猥な水音が響き、目線は自然と揺れる乳房へ吸い寄せられた。

硬く立った乳首が上下に揺れるたび、目の奥まで熱くなる。

「んっ…あ…♡ クリも…あたって…きもちい…♡」

腰を前に倒し、俺の胸に手をついてピストンを速める。

奥を突くたび、膣壁がびくびくと痙攣し、愛液が熱く絡みつく。

「んうっ…宗介の、きもちい…だめ…また…イクっ♡」

腰をかくかくと震わせ全身を弓なりに反らせて絶頂に沈むいちか。その締めつけに耐えきれず、俺も奥へどくどくと熱を吐き出した。

「宗介…」

「ん…？」

「こんどは、乳首…いじって…♡」

潤んだ瞳でおねだりされ、思わず指で硬くなった先端を転がす。

「んんっ…っ♡ それ…もっ…と…」

軽くつねると腰の動きがさらに激しくなり奥がきゅつと締まった。

「やば…気持ちよすぎて…っ」

俺の声にいちかは薄く笑い自分のクリを擦りながら深く沈み込む。

「っあ…♡ また…くるっ♡」

その夜、俺は完全に彼女の腰に支配され、何度も限界を迎えた。

一方の倫太郎も、胸の奥で別の夜を思い出していた。

上京直前、地元の仲間との送別会。

酔いが回った帰り道、「ちよつと寄ってかない？」

いちかのその一言で、理性がぶっ飛んだ。

彼女の部屋で並んで座った瞬間、もう我慢できずに唇を奪う。

「んっ…んん…♡」

舌を絡め、互いの服を乱暴に脱がせ合い、ベッドに倒れ込む。

シーツに四つん這いになったいちかの背中中は白く滑らかで、腰のくびれから豊かな尻の丸みへと続くラインが完璧すぎた。

「ねえ…後ろから、ハメて…♡」

潤んだ瞳でそうおねだりされ、頭の中が真っ白になる。

腰を掴み、先端を濡れた割れ目に押し当てる。

「……入れるぞ」

「うん…倫太郎の、いっぱい、ほしいの…あっ…♡」

熱い肉が先端を迎え入れ、ぬるりと奥へ呑み込んでいく。

ずぷっ…ずちゅっ…ぐちゅっ…

奥まで突き抜けた瞬間、全身の血が沸き立つ。

深く突き込むたびに尻肉が俺の腰に打ちつかって甘い音を立てる。

「あっ…♡倫太郎……さすが…ドラム…だね…♡」

息を乱しながらそんな可愛いことを言うから、さらに力がこもる。

腰を突き上げるたび、彼女の体が前へ押され、胸がベッドに潰れて形を変える。

「ねえ…後ろから、クリちゃん…触って…♡」

またもや甘くおねだりされ、理性が完全に吹き飛ぶ。

腰を打ちつけながら、片手を回して柔らかな丘を撫で小さな突起を指先で転がす。

「んあっ♡ あっ…そこ…だいすきっ♡」

その瞬間、膣内がぎゅうつと締めまり、背中が弓なりに反る。一度絶頂しても、尻を揺らしながらさらに奥を求めてくる。

「倫太郎、もっと…♡ 激しく、して♡」

小刻みに震える腰に合わせ、俺もリズムを崩さず突き込む。

ぱんっ…ぱんっ…ずぶっ…

汗が滴り、腰と尻がぶつかる音と蜜の水音が混ざり合い、部屋の空気は甘く濃くなる。

気づけば、自分も限界を超えて腰を止められなくなっていた。

奥へ熱を流し込みながら背中越しに伝わる彼女の震えと、あの夜の匂いが——今でも思い出すたび、俺の理性を容赦なく削っていく。

(……俺だけの秘密)

(……俺だけの秘密)

二人は全く同じことを心の中で思いながら、並んで歩いた。

その夜。狭いアパートに到着し、ある程度の荷物を整理したあと疲れ果てたいちかは「おやすみ」と個室へ入り、そのまま眠りについた——はずだった。

深夜。

水を取りに行こうと廊下に出た倫太郎は、ふと足を止めた。

——いちかの部屋のドアが、ほんの数センチ、開いている。

(……換気か?)